

## 報告

## 異文化対応力の測定と 海外研修プログラムの評価・参加学生の変化 (2018年度全国大会 シンポジウム 報告)

小野 博<sup>A</sup>

グローバル人材育成教育学会に異文化対応力育成研究専門部会を発足させ、最初の統一的な研究テーマとして、異文化対応力の測定方法の開発に取り組んでいる。

近年、グローバル人材の育成に積極的な大学が増え、海外派遣準備学習として英語教育等の事前研修を行った後、海外での英語学習、サマーコースの受講、ワークショップの開催、インターンシップへの参加、ボランティア活動などを実施し、多様な目的で海外活動する学生への支援に積極的に取り組む大学教員もまた増えている。実際には短期間の研修では英語力の大きな伸びは期待できないものの、教員の目から見てもコミュニケーション能力や異文化対応が大きく成長して帰国する学生が多いよう

である。このことから、これらの資質の変化を客観的に測定し、同じ大学における多様なプログラムの成果の比較や、留学等の長期派遣と短期派遣の比較、個人の変化の比較ができるような測定方法を開発し、派遣プログラムの改善に反映させたいとの要望が担当教員から専門部会にも寄せられている。そこで、専門部会のメンバーが6回の研究会を開催した。そこでは、海外にある同種の評価方法にまず着目し、海外の測定方法が日本の学生の異文化対応力やその変化の測定に役立つか等を検討した。そして、それらの内容を参考にしつつ、日本の学生の特質を客観的に測定する方法の開発について研究を続けてきた。

今回のシンポジウムでは、まず、専門部会長の長崎大学の古村氏から「異文化対応力向上を目的とした教育方法の提案」と題し、本研究会で行っている

A: 昭和大学・中村学園大学・西九州大学 客員教授

異文化対応力の測定方法に関して、Byram (1997, 2008) の Intercultural Communicative Competence の理論を参考に、日本人学生を対象に様々な異文化対応力に関するアセスメントのコアとなる基本的構成要素についての説明があり、その後、異文化対応力を高める教育方法の一例についての紹介があった。

次に、「日本人学生の特徴を考慮した異文化対応力測定法」について佐賀女子短期大学の青柳氏から、入手できた 17 種類の内外の異文化対応力測定法について説明があった。その中で特に、海外のテストの中には日本人高校生・大学生が答えにくい、または聞いてはいけない質問まであるため、日本の状況を十分に反映したテスト項目を作ることの重要性が強調された。また、このような異文化対応力アセスメントはアメリカで開発されたものやビジネスマン対象のものが多いため、専門部会としては、日本人学生の異文化対応力には独特のものがあるかもしれないと考え、その特質との関連を鑑みて学生の資質の変化を十分に反映できる測定法の開発を

目標としているとの報告があった。

その後、統計的手法の観点から実際の質問紙の作成とデータ分析について「異文化対応力測定尺度作成の試み」として、大阪体育大学の工藤氏から、調査時間の短縮や質問内容の平易化、分析方法と分析結果の表示方法等について説明があった。

工藤先生のデータ分析結果を引用して、福岡大学の佐々木氏からは「異文化対応力の変化から見た海外研修プログラムの評価と学生の変化」と題し、実際に大学に導入した際の利用方法について、さらに 2018 年度の研修前後の変化を示す調査結果についての報告があった。

最後に、専門部会は、派遣前後における異文化対応力の変化に関する、これまでの専門部会による試行試験を踏まえ、2019 年 2 月の関西支部大会時に開催する研究会で専門部会としてのまとめを行い、今後さらなる改良を目指すため、学会員に広く利用していただきたいとの呼びかけを行なった。

受付日 2019 年 2 月 18 日、受理日 2019 年 3 月 16 日

